

今を語る

第76回

いま価値観を変えるべき時代に

藤沢 久美

(シンクタンク・ソフィアバンク副代表
社会起業家フォーラム副代表)



聞き手 編集人・坂井茂樹

女性の社会進出には 女性の意識変革も必要

——二〇〇七年に世界経済フォーラム(ダボス会議)のヤング・グローバル・リーダーズ(YGL)としてダボス会議に出席されたそうですが、会議に女性はどのくらい参加しているのですか。

藤沢 今年、日本人では緒方貞子さん、川口順子先生、猪口邦子先生がいらして、あとは出席者の奥様方ですね。日本の女性で参加のあった人は、ほかにいらしたのですが、ご出席されませんでした。日本だけではなく、ダボス会議全体で、女性は半数にまったく届きません。

ダボス会議でジェンダー・イシュー(性差問題)の特別セッションはいくつも用意され

ているのですが、日本と海外とでは全然様子が違うんですね。特に途上国では、女性が社会に一步も入り込めないようなところが、まだあります。日本は相当恵まれていて、むしろ女性の働きたいという気持ちをどう日々の生活の中で確立していくかのほうが、もっと大事ではないかと思わざるを得ません。

——日本では男女雇用機会均等法が施行されて二十年以上たちますが、未だにいろいろな会合に出ると男性ばかりでしょう。

藤沢 男性や社会にも問題はあろうが、女性にも問題があると思います。女性は本当に働きたいと思っているのかどうか、一度よく考えてみなければいけません。

女性が優秀で、男性は弱くなったという話もよく聞きますが、その子を育てたのはお母さんでしょう。その影響は大きいと思うのです。働くお父さんを給料を持つてくるマシン

のように扱って、支えてくれて当たり前というような姿勢。あるいは子供に対しても「将来は私の面倒を見てね」と依存する。そのような依存を持つていくのは当然でしょう。男の子が弱くなっているのは当然でしょう。

依存を持つていく女性に働く場所を用意してあげても、あまりいいことにはならないと思います。女性がもっと世に出るためには、社会の仕組みも必要ですけれども、もっと女性も、働いて責任を持つていこうのはどのようなことを考えないといけません。

——「ワーク・ライフ・バランス」がここ数年喧伝(けんでん)されましたが、不況で仕事がなくなると誰も言わなくなりました。私は、ライフ・ワーク・バランスと、ライフが先に来るのが本当ではないかと思うのです。

藤沢 その言葉を日本に持ち込まれた方に話を聞くと、休み時間をきちんと取るとか、趣味を充実させようとかではない。まず仕事でちゃんと生きがいを持つことがワークとライフのバランスで、今のワーク・ライフ・バランス論は非常に心外だと。私も同感です。

働くことの意味を問い直し 考え方を変える

——世界同時不況の中で行われた今回のダボス会議は、どのような雰囲気でしたか。

藤沢 深刻さが足りないという印象です。史上最高の数の各国の首脳が参加されたのです

が、そこまでくると皆さんおっしゃることはほとんど共通なのです。世界横断的な管理組織が必要だとか、これまでの資本主義が利己主義だったので、自分だけ短期で儲けるといような金融市場の在り方を見直さなければならぬとか。先進国だけがリードする世界はもう終わりで、みんな協調して途上国や新興国も入れて、G8からG20、G30、40、60まで言う人がいて、そのくらい広くやっていたとかの話で共通していました。

皆さんが楽観的になりがちだったのは、インドや中国などはまだ成長するだろうとか、オバマがアメリカの大統領になり世界に变革を起こすとか、何か夢のような話に、どこか頼っているところがあるのです。

一方で、今回のダボス会議で光ったのは、宗教家です。「制度やモットーをつくるのもいいでしょう。でも、それを運営するのは人間であり、その人間が考え方を本当に変えられるかどうか。人間がこれから存続するためには、考え方を変えなければ、何の解決にもならず、同じ事が繰り返される。トップリーダーたちは、どのようにそれを態度で示すか、そこに戻らなければならぬ」というお話をされて、そこに真実があると思うのです。

たぶん、中小企業の経営者の方のほうが、実践していらっしゃる。自分の生き方を仕事の中でリーダーとして、きちんと背中で見せていらっしゃるのです、それを今度は国のレベルでどうしていくかということが、課題とし

て突きつけられた感じがします。

——感謝の気持ちとか、そういうシンプルな原点に戻る必要があるのでしょうか。

藤沢 坂井社長は「不況の時こそ原点に戻らなければいけない」といつもおっしゃっていますが、この百年に一度と言われる状況の中では、戻るべき原点は、さらに深いところだと思えます。ソフィアバンクにキャッチフレーズがあって、「生き方、働き方を考えるシンクタンク」というのです。今までシンクタンクというと経済・政策だったのですけれども、さらに生活・文化を考え、生き方、働き方を提案するということを掲げているのは、そのような意味があります。

——先ほどのワーク・ライフ・バランスの話も、自分の生き方の中の働き方でしょ

うが、多様な働き方や働く場から選べる環境下での課題ですね。

藤沢 ところが、働くことが、生きることと飛び越して、お金を稼ぐことになってしまっているですね。本当の原点に戻るには「なぜ働くのか」に戻らなくてははいけません。そこを突き詰めていくと、宗教も哲学も、答えは一緒のところへ行き着くのです。人間は、一生仕事をしなくて幸せかというと、そうではない。やはり誰かに喜ばれることで、自分の存在があるわけです。仏教で「諸法無我」といいますが、「我」というものは相対的な存在で、誰かのために働いて感謝されることで自分が存在するということです。だから、働くということは、生きていることを確認する一番根本のことなのだと思います。



PROFILE 藤沢久美 (ふじさわ・くみ) 氏

大阪府生まれ。1989年、大阪市立大学卒業後、内外の投資運用会社に勤務。96年、日本初の投資信託評価会社アイフィスを起業、代表取締役。2000年、シンクタンク・ソフィアバンクの設立に参画。03年、社会起業家フォーラムを設立、副代表。04年、シンクタンク・ソフィアバンクをMBOし副代表に就任。07年、世界経済フォーラム（ダボス会議）ヤング・グローバル・リーダーズ2007に選出。NHK教育テレビ「21世紀ビジネス塾」のキャスターを02年から3年間務めたのをはじめ、現在も全国の元気な企業の経営者のインタビューと現場の取材を続けて発信している。「なぜ、御用聞きビジネスが伸びているのか」「脱・家族経営の心得」ほか著書多数。（撮影・西村陽一郎）

——終戦から六十年以上たって、物質的には大きく拡張したけれども、精神面では、思いやりとか、いろいろなことが置き去りにされてきた気がしてならないのです。

藤沢 同感です。便利を求めすぎたのです。精神は、つらいことを経験しないと成長しないものです。ところが、便利を求めることで、精神の修練をできるだけしなくていいようになつてきました。それから、考える力が弱っていますね。マスコミも単一報道しかしないだから、みんなが考えるための軸を持ってなくなつてきています。ですから、私は素晴らしい経営者の方々のインタビューをさせていただいて、多くの人に、考えるためのさまざまな軸を提供していきたいと思つていっているのです。

「大変だ」と言うより 発想の転換を

——『なぜ、御用聞きビジネスが伸びているのか』という本を以前出されていますが、車に乗れない高齢者がますます増えるので、もつとニーズが出てくると思つたのです。

藤沢 やはり昔に戻るといふことでしょう。

昔は自動車を持っていなかったから、持っている酒屋さんが御用聞きをしていた。でも、自動車をみんなが持てるようになって廃れたのだけれど、再び若い世代の人口が減つて、自動車を持てなくなったときに、自動車が古い時代の知恵に戻るのには自然なことです。

ただ、昔と違うのはITという効率化のツールができたので、事前に注文したり、あるいはお客さまの嗜好をチェックして、効率的に商品アドバイスを提供できたりする、一段進化した御用聞きになつていっているのです。

——その点では、エレベーターやエスカレーターで縦に移動しなくてはならないショッピングセンターではなく、昔のような平坦で長い商店街も見直されますね。

藤沢 商店街は専門家集団ですから、そこに来ていただくことも大切ですが、商店街がみんな力で合わせて御用聞きをして、専門家の知恵を消費者のところにお届けするということを考えるといいと思います。商店街の御用聞きに補助金が出る政策もできまして、そろそろ本格的になつてくるでしょう。

——「大変だ、大変だ」と言っていますけれども、発想を転換して頑張っている経営

者はいるわけですよ。

藤沢 いまインタビューを受けてくださる会社というのは、みんな「大変だ」とはおっしゃらない会社なのですね。

先日お話をうかがった会社では、作るものは必ず世界一、二でなければならぬとか、製品寿命が短いものには一切手を出さぬとか、決まり事があつて、とにかく「長く」ということをおっしゃるのです。私も、企業経営をするときには長い視点が必要だと思えます。短い視点が起こしたのが、今回の金融危機の問題です。

そこで、「しかし、長い視点を持つことは難しいことではないか」と質問すると、社長がおっしゃるには、「いま突然経営を悪化させないようにするにはどうしたらいいか。そのことを突き詰めると、結果的に長く存続することにつながる。急にほかの分野に手を出したり、急に量産したり、急に人材を増やしたりすると、必ず急に悪くなる。そうならなために、何をしないようにすればいいかを列挙していくと、結果的に長い目でものを考えることにつながる」と。

どんな人でも、時間を味方につけることができれば、日々改善を行い、知恵が蓄積されていって、時間がたつと大きな財産、大きな付加価値になり、真似して始めた人とは全然違うことになる。非常に仏教的になつてきますが、だからこそ、一日一日が大切ということなのだと思えます。

私たちは、経済大国になつたせいで、
尊敬される軸を間違えてしまつている



日本は自信を持つ 必要がある

——こういう時期には特にそうでしょうけど、企業を経営するときには、経営者と社員とが言葉を共有しないとダメですね。ところが、日本ではうまく説明できない外国語は、そのままカタカナで……。

藤沢 欧米文化が上という意識が強いのでしょう。日本の一番の問題は、自信のなさだと思います。特に海外に出たときには、言葉の壁もありますし、アジア蔑視もまだまだ大きい。公の場では出さなくても、心の底では蔑視している二重性を感じるのです。それで、強い人でも自信を殺されるでしょう。

——日本のGDPは一九六八年以降、世界二位を維持しています。この地位を保持しないと、世界で低く見られるのでしょうか。
藤沢 経済の規模では、今も決して尊敬されていないですね。あるとき、中国人が傲慢な

態度でスピーチするのを見て、アメリカ人に「ひどかったね」と言うと、「二十年前の日本人にそっくりだよ」と言われたのです。お金をたくさん持っている経済大国だからといっても、決して尊敬されないのです。

ところが、世界を回ると、日本のことをすごいと言ってくれる人はいっぱいいます。どこがすごいかというと、人間が素晴らしい。すごく繊細で、品質に対してきめ細かくて、真面目である。そのような人間がいるからこそ、素晴らしい自動車や電気製品が生まれる。もう一つ言われたのは、環境問題の解決にいち早く取り組んだ国は日本だということです。つまり、日本は知恵で評価される国なのだと思います。いま私たちは、経済大国になつたせいで、尊敬される軸を間違えてしまっている。本当は、日本人としての生き方、働き方、そこが尊敬される場所だったのでないでしょうか。

——アジアグループから日本が尊敬される可能性はどうでしょう。

藤沢 私は十分にあると思います。日本は、ある意味、憧れられています。資源がなく、国土も狭くて、これだけ発展した不思議な国だから、学びたいと思っている。

——世界一の長寿国です。なぜここでもう少し自信を持っていないのですかね。

藤沢 やはり戦争に負けたことが大きいでしょう。戦前は、無謀といえるほどの自信を持っていたのですから。それが、戦後は自信

を奪う教育をされた。だから、戦前にお生まれになった経営者の方々は、やはり自信を持って、凛としていらつしやいます。

——小泉八雲も、農民の高い文化を知って、このような国はないとたたえている。それが今は、レコード大賞でも横文字の曲ばかりになってしまつて。

藤沢 ただ、今はそれに対する反動が確実に起きています。西陣織から室内装飾に展開された川島織物セルコンの社長さんにお話をうかがったとき、「文化って何でしょうか」という質問をさせていただいて、そのお答えに非常に感銘を受けたのです。「文化というのは、ただそのまま守るものではない。文化というのは生活習慣を表した言葉なんだ。だから、昔からある西陣織なら西陣織を、どうやってその時代の生活に合わせて変化させていくか。根底には、西陣の織り方とか美しさとか、そういうものはずっと続いて、その表現形態、使い方は変わっていく。それが文化です」と言われて、まさにそうだと思つて。

いま若い人たちが、三味線や尺八などの和楽器や雅楽というものを見直していて、横文字の音楽なのだけれども、和楽器で演奏したりしています。私は、それは文化の進化だと思つています。そのような流れは着実に出てきています。われわれにできることは、それを応援することではないでしょうか。

——いろいろ示唆に富むお話をいただき、ありがとうございました。